

## 【審査論文】

## 千葉県都市部高齢者の社会的側面とサクセスフル・エイジングに関する 縦断研究

岡本秀明

### The relation between social aspect of the elderly and successful aging : The Chiba Longitudinal Study of Aging

Hideaki OKAMOTO

#### 要旨

千葉県都市部に在住する高齢者を3年間追跡した縦断調査データを用いて、社会的側面に着目し、サクセスフル・エイジングに関連する要因を明らかにすることを研究目的とした。調査対象者は、千葉縣市川市、浦安市、船橋市、習志野市に在住する65歳から79歳までの者計2,000人とした。調査方法は、自記式調査票を用いた郵送調査とした。初回調査を2010年に、追跡調査を2013年に実施し、最終的な有効回答者数は717人、分析対象者数は618人となった。サクセスフル・エイジングの測定には、生活満足度、日頃の生活満足感、社会活動に関連する過ごし方満足度の3つの指標を用いた。多変量解析の結果、第1に、年齢が若いこと、社会活動が活発なことが、3年後の生活満足度を高めていた。第2に、経済的な暮らし向きが良好なこと、社会活動が活発なことが、3年後の日頃の生活満足感を高めていた。第3に、年齢が若いこと、経済的な暮らし向きが良好なこと、社会活動をしていること、プロダクティブな活動が活発なことが、3年後の社会活動に関連する過ごし方満足度を高めていた。サクセスフル・エイジングの3つの指標すべてを高めていた要因は、社会活動が活発なことであった。

**キーワード：**サクセスフル・エイジング (successful aging)、地域高齢者 (community-dwelling elderly)、満足度 (satisfaction)、社会的側面 (social aspect)、縦断研究 (longitudinal study)

#### I. 研究の背景と目的

サクセスフル・エイジング (successful aging)、つまり幸せな老いは、これまでおよび今日において誰もが願う普遍的なものであり、これからも変わらないものであろう。サクセスフル・エイジングの日本語訳として共通して使用されているものはないが、端的に言えば、幸せな老い、幸福な老いである。柴田は、「老年期において、実り多い満足すべき人生を送り天寿をまっとうするという意味の用語」<sup>1)</sup>としている。サクセスフル・エイジングの概念は、とても大きく、かつ複雑である。サクセスフル・エイジングとは何か、どのようにすれば実現できるのかをはじめ、さまざまな議論がなされ、数多くの研究が行われてきた。サクセスフル・エイジングについてレビューした文献も増加しており、わが国においてもみられる<sup>1-4)</sup>。

サクセスフル・エイジングの枠組みを示した広く知られている研究として、RoweとKahnのものがある。

RoweとKahnは、サクセスフル・エイジングを構成する3つの要素として、病気や病気に関連する障害の発生可能性が低いこと、高い水準の身体的や認知的機能があること、社会活動や生産的活動（productive activities）にかかわることをあげている<sup>5)</sup>。Crowtherらは、RoweとKahnのサクセスフル・エイジングを構成する3つの要素に、積極的な精神（positive spirituality）を加えて4つとすることを提案している<sup>6)</sup>。柴田は、RoweとKahnによるサクセスフル・エイジングを構成する3つの要素には、高齢者の生活の質を考えるうえで不可欠な主観的幸福感（subjective well-being）が欠けていたため、主観的幸福感とは用語が異なるもののCrowtherらが積極的な精神を加えたことに一定の評価をしている<sup>1)</sup>。

多くの者が、病気や障害がなく、高い認知的機能を維持し、社会的な関与をしながら幸せを感じて高齢期を過ごしたいと思うであろうが、このようなサクセスフル・エイジングの考え方に対する批判もある。われわれの多くが老いるにつれて虚弱で身体的自立が困難になり、社会的な関与をしながら生活を送ることが難しくなっていくため、サクセスフル・エイジングを達成し続けることができない、という点である。それまでサクセスフル・エイジングを達成していた者でも、その後老いて虚弱になり、「失敗した老い」を迎えることになってしまう。よって、虚弱な高齢者を含めた多様なサクセスフル・エイジングのあり方の検討が必要との指摘<sup>7)</sup>も多い。

サクセスフル・エイジングを測定する指標は、大きく分けると客観的な指標と主観的な指標の2つになる。客観的な指標の例は、生存、疾病や障害の有無、社会的な活動の状況、主観的な指標の例は、生活に関する満足度や肯定的・否定的な感情などを総称する主観的幸福感である<sup>2)</sup>。例えば、Menecによる研究では、生活満足度、幸福感、身体的機能や認知的機能から総合的に判定した機能、生存という4つの指標を用いている<sup>8)</sup>。Brandtらによる研究では、病気の有無、日常生活動作（ADL）障害の有無、認知的機能、高次の身体的な機能、有償労働と無償労働を含んだ社会的な活動への関与という5つの指標と、これらを総合したグローバル指標を用いている<sup>9)</sup>。

客観的な指標と主観的な指標のそれぞれに、長所と課題点が存在する。客観的な指標の長所は、高齢者自身や取り巻く環境を定めた方法に従って測定するため、同じ状況の高齢者であれば同じ測定結果が得られることである。課題点は、ある高齢者の測定結果が社会的にみて望ましい状況であったとしても、その本人が望んでいる状況と異なっていたり望む状況からほど遠かったりすれば、幸福感が低くなり、客観的な状況が良いと言われても本人は幸せではない、ということがあり得る点である。主観的な指標の長所は、幸せを感じていないよりも感じているほうが良いであろうから、主観的幸福感そのものを測定する点である。課題点は、主観的幸福感が高いが社会的にみて望ましくない状況にあった場合、本人が幸せを感じているからそれはそれでよいと判断するのだろうか、という点である。

このように、それぞれ長所と課題点があるため、客観的な指標と主観的な指標の双方を用いるのが望ましいともいえる。しかしながら、サクセスフル・エイジングの研究では、主観的幸福感といった主観的な指標のみが用いられることが比較的多い。どのような状況が幸福な老いであるのかは人により異なり、幸福な老いを定義しようとすると抽象的で不毛な論争に終始してしまう可能性が高いこと<sup>4)</sup>、本人がどのように感じているかが重要であること、個々人によって異なる高齢者自身の状況や取り巻いているさまざまな環境を考慮した結果とみなせるのが主観的幸福感であることが、主な理由である。

サクセスフル・エイジングの研究は、わが国でも増加し、知見の蓄積が進んでいる。しかしながら、一時点の調査データをもとにした横断研究が多く、調査対象者を追跡したデータを用いて検討した縦断研究が少ない。また、長命、身体的自立の維持、認知症の予防といった健康の維持を重視した研究だけではなく、その時点での自分自身の健康状態を考慮しながら社会的なかわりをもって豊かな高齢期を過ごすこ

とに関心をもった研究も進めていく必要がある。つまり、単に良好な健康状態を維持しているのではあるが無味乾燥な高齢期の生活になってしまっているかもしれないというよりは、個々人がそれぞれの状況に応じて社会的に豊かな生活を送れること、という視点が大切であるとする。よって、高齢期における社会的ななかかわりに関心をもち、縦断調査データをもとにしたサクセスフル・エイジング研究を積み重ねていくことが求められる。

以上のような背景から、本研究では、高齢者の社会的側面に着目しながら、サクセスフル・エイジングに関連する要因を明らかにすることを目的とした。その際には、調査対象者を追跡し、縦断調査データを用いて検討することにした。本研究におけるサクセスフル・エイジングとその指標に関して、主観的な指標の長所を重視し、また、これまでの研究において主観的な指標が比較的多く用いられてきたことを考慮し、サクセスフル・エイジングを、高齢期の生活に関して満足度の程度が高いことと操作的に定義した。そして、サクセスフル・エイジングの測定には、満足度に関する複数の指標を用いることにした。

社会的側面に関して、高齢者研究では社会的側面の代表的な指標として、社会関係、活動や社会参加に関する指標<sup>10)</sup>がよく用いられる。本研究における社会関係の指標は、社会的孤立を予防し、非親族とのつながりを示す指標の1つである友人と会う頻度<sup>11-13)</sup>を用いることにした。活動や社会参加に関する指標は、RoweとKahnがサクセスフル・エイジングの構成要素として示している社会活動と生産的活動（プロダクティブな活動：productive activities）<sup>5)</sup>を用いることにした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 調査の対象と方法

調査対象地域は、千葉県の都市部4市（市川市、浦安市、船橋市、習志野市）とした。この都市部4市は、千葉県のなかで、東京に近いこと、都市部として発展している東京湾に面した湾岸地域であること、人口密度が高いこと、という都市部の条件を設定して選択した。人口密度の高さは、浦安市が千葉県1位で9,530.5人/㎢、市川市が同2位で8,243.5人/㎢、習志野市が同4位で7,838.5人/㎢、船橋市が同5位で7,111.6人/㎢であった<sup>14)</sup>。なお、同3位は松戸市であったが、東京湾に面していない。人口と高齢化率（全人口に占める65歳以上の割合）は、市川市が473,919人、19.1%、浦安市が164,877人、11.7%、船橋市が609,040人、19.6%、習志野市が164,530人、19.1%であった<sup>15)</sup>。なお、同時期の全国の高齢化率は23.0%であった<sup>16)</sup>。

千葉県都市部4市に在住する65歳から79歳までの2,000人を住民基本台帳から無作為抽出して調査対象者とし、自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。初回調査は2010年9～10月に実施し、有効回答（率）は1,067人（53.4%）であった。このうち、代理回答ではなく、年齢や性別などの基本的な項目に回答があった997人を対象に、追跡調査を2013年9～10月に実施した。年齢と性別に回答があったものを追跡調査の有効回答としたところ、有効回答（率）は717人（71.9%）となった。このうち、代理回答を除外した714人を対象とした縦断調査データベースを作成した。

### 2. 倫理的配慮

倫理的配慮に関して、調査の際に、回答データは統計的处理を行い個人の特定を行わないこと、対象者の情報は厳重に管理していること、調査協力が困難な場合には返送しないでよいことを調査協力文書に明記し、協力が得られる場合には調査票を無記名で返送するよう依頼した。

### 3. 分析に使用した変数

#### (1) 基本的属性

基本的属性は、初回調査でたずねた、年齢、性別、家族形態、IADL (Instrumental Activities of Daily Living; 手段的日常生活動作)、経済的な暮らし向きとした。性別は、男性=1、女性=0、家族形態は、独居=1、独居以外=0とした。IADLは、「日用品の買い物」「預貯金の出し入れ」「バス・電車の利用」の3項目すべてについてひとりでできる者を「自立=1」、ひとりでできない項目が1つ以上ある者を「非自立項目あり=0」とした。経済的な暮らし向きは、「大変ゆとりがある=5」、「ややゆとりがある=4」、「ふつう=3」、「やや苦しい=2」、「大変苦しい=1」とした。

#### (2) 社会的側面

社会的側面は、初回調査でたずねた、友人と会う頻度、社会活動、プロダクティブな活動を用いた。友人と会う頻度は、「なし」と、会っている者の頻度をもとに二等分に近くなるようにして「高群」と「中群」に分け、3つの群に分けた。そして、「なし」を低群、「年に数回」と「月に1～2回」を中群、「週に1～2回」と「週に3回以上」を高群とし、「低群」を基準(=0)とする2つのダミー変数を作成した。

社会活動は、「老人クラブ」「町内会・自治会」「趣味の会などの仲間内の活動」の3項目それぞれについて、活動ありに1点、活動なしに0点を付与して加算し、得点化した。この得点をもとに、0点を「低群」、1点以上は二等分に近くなるようにし、1点を「中群」、2点以上を「高群」と分け、「低群」を基準(=0)とする2つのダミー変数を作成した。プロダクティブな活動とは何かについて、定義の例として、有償であろうとなかろうとモノやサービスをうみだす活動で、家事、子どもの世話、ボランティア、家族や友人への支援のような活動を含む<sup>17)</sup>というものがある。本研究では、「ボランティア」「同居の孫などの乳幼児の世話」「同居家族の介護・看病などの世話(乳幼児を除く)」「別居家族・親戚の孫や乳幼児の世話」「別居家族・親戚の介護・看病・家事・手伝いなどの手助け(乳幼児を除く)」「友人・近隣の乳幼児の世話」「友人・近隣の介護・看病・家事・手伝いなどの手助け(乳幼児を除く)」の7項目それぞれについて、活動ありに1点、活動なしに0点を付与して加算し、得点化した。この得点をもとに、0点を「低群」、1点以上は二等分に近くなるようにし、1点を「中群」、2点以上を「高群」と分け、「低群」を基準(=0)とする2つのダミー変数を作成した。

なお、プロダクティブな活動には、「自宅での家事」「仕事」という項目も含むことが多い<sup>17,18)</sup>が、本研究では除外した。その理由は、「自宅での家事」はほとんどの者が行っており、この項目を含む意味がほとんどないためであった。「仕事」については、仕事に就いていた者は定年退職などにより仕事から引退し、それまで仕事一筋であった者も含めて、自由になる時間が多く長期化した高齢期をいかに充実して過ごしていくのかという視点が大切なため、除外した。

社会活動とプロダクティブな活動の概念は重なる部分があり、本研究でいえば「ボランティア」が重なる部分に該当する項目となる。ボランティアはプロダクティブな活動において代表的な活動の1つ<sup>17)</sup>であること、社会活動とプロダクティブな活動の双方を取り扱った研究でボランティアをプロダクティブな活動に含んでいたこと<sup>8)</sup>から、本研究では社会活動ではなくプロダクティブな活動に含めた。

#### (3) サクセスフル・エイジング

本研究では、サクセスフル・エイジングの程度をあらわすものとして、生活満足度、日頃の生活満足感、社会活動に関連する過ごし方満足度の3つの指標を用いた。生活満足度は、「人生全体についての満足感」



「心理的安定」「老いについての評価」の3因子、計9項目により構成され、得点範囲が0～9点の生活満足度尺度K（LSIK; Life Satisfaction Index K）<sup>19)</sup>を用いた。

日頃の生活満足感は、「日頃の生活の充実感」と「日頃の過ごし方の満足感」の2項目の得点を合計したものをを用いた。「日頃の生活の充実感」の項目では、「とても感じている」に5点、「まあ感じている」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまり感じていない」に2点、「まったく感じていない」に1点を付与し、「日頃の過ごし方の満足感」の項目では、「とても満足している」に5点、「まあ満足している」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまり満足していない」に2点、「まったく満足していない」に1点を付与した。得点範囲は、2～10点である。社会活動に関連する過ごし方満足度は、友人満足度（3項目）、他者・社会貢献満足度（4項目）、学習満足度（4項目）、健康・体力満足度（3項目）の4つの下位尺度で構成され、得点の範囲が14～70点の社会活動に関連する過ごし方満足度尺度<sup>20)</sup>を用いた。

以上の満足度に関する3つの指標は、いずれも得点が高いほどその満足度が高いことを示す。3つの指標それぞれの特徴について、生活満足度（LSIK）は、これまでの人生を含めた満足度をたずねる回顧的な項目が複数あるため、回答時現在だけではなく、これまでの人生も考慮したうえでの満足度といえる。一方で、日頃の生活満足感は、日頃の生活の充実感や過ごし方の満足感をたずねたものであるため、生活満足度（LSIK）と比較して、回答時現在における生活の満足の程度という意味合いが強いといえる。社会活動に関連する過ごし方満足度尺度は、おもに社会活動などの活動から得られた満足度に重きをおいた高齢期の過ごし方の満足度を把握するもの<sup>20)</sup>となっている。社会活動などの活動に関与していない場合には満足度が下がる傾向がある<sup>20)</sup>ため、生活満足度（LSIK）や日頃の生活満足感と異なり、社会活動などの活動に関与し、その活動から得られる満足感が占める割合が大きい指標といえる。

#### 4. 分析方法

分析対象者は、先述した年齢と性別に欠損値のない714人の縦断調査データベースのうち、初回調査時の家族形態、IADL、経済的な暮らし向き、友人と会う頻度、社会活動、プロダクティブな活動に欠損値がないこと、初回調査時と追跡調査時の生活満足度に欠損値がないことを条件にしたため、618人となった。

分析には、追跡調査時における満足度に関する3つの指標それぞれを従属変数とする重回帰分析を用いた。独立変数には、初回調査時における年齢、性別、家族形態、IADL、経済的な暮らし向き、友人と会う頻度、社会活動、プロダクティブな活動を投入した。加えて、初回調査時の各満足度を統計学的にコントロールするため、それぞれの分析において該当する初回調査時の満足度指標も投入した。

### Ⅲ. 研究結果

単純集計結果は、表1に初回調査時の基本的属性、表2に初回調査時のIADL、表3に初回調査時の友人と会う頻度、表4に初回調査時の社会活動の項目、表5に初回調査時のプロダクティブな活動の項目、表6に初回調査時の社会的側面、表7に初回調査時と追跡調査時の各満足度指標について示した。

重回帰分析の結果を表8に示した。3年後の生活満足度に統計学的に有意な影響を及ぼしていた要因は、年齢、社会活動の高群であった。すなわち、年齢が若い、社会活動の低群と比べて高群は、生活満足度が高かった。3年後の日頃の生活満足感に有意な影響を及ぼしていた要因は、経済的な暮らし向き、社会活動の高群であった。すなわち、経済的な暮らし向きが良好、社会活動の低群と比べて高群は、日頃の生活満足度が高かった。3年後の社会活動に関連する過ごし方満足度に有意な影響を及ぼしていた要因は、年

年齢、経済的な暮らし向き、社会活動、プロダクティブな活動の高群であった。すなわち、年齢が若い、経済的な暮らし向きが良好、社会活動をしている、プロダクティブな活動の低群と比べて高群は、社会活動に関連する過ごし方満足度が高かった。

なお、社会活動の低群と比べて高群は、満足度の3指標すべてを高めていた。

表1 初回調査時の基本的属性 (n=618)

	人 (%)
年齢	
平均値±標準偏差	70.8±3.9
性別	
男性	321 (51.9%)
女性	297 (48.1%)
家族形態	
独居	71 (11.5%)
独居以外	547 (88.5%)
日用品の買い物	
できる	610 (98.7%)
できない	8 (1.3%)
預貯金のおし入れ	
できる	599 (96.9%)
できない	19 (3.1%)
バス・電車の利用	
できる	613 (99.2%)
できない	5 (0.8%)
経済的な暮らし向き	
平均値±標準偏差	3.1±0.7

表2 初回調査時の IADL (n=618)

	人 (%)
自立	592 (95.8%)
非自立項目あり	26 (4.2%)

表3 初回調査時の友人と会う頻度 (n=618)

	人 (%)
週に3回以上	83 (13.4%)
週に1~2回	153 (24.8%)
月に1~2回	177 (28.6%)
年に数回	162 (26.2%)
なし	43 (7.0%)

表4 初回調査時の社会活動の項目 (n=618)

	人 (%)
老人クラブ	
活動あり	107 (17.3%)
活動なし	511 (82.7%)
町内会・自治会	
活動あり	324 (52.4%)
活動なし	294 (47.6%)
趣味の会などの仲間内の活動	
活動あり	408 (66.0%)
活動なし	210 (34.0%)

表5 初回調査時のプロダクティブな活動の項目 (n=618)

	人 (%)
ボランティア	
活動あり	194 (31.4%)
活動なし	424 (68.6%)
同居の孫などの乳幼児の世話	
活動あり	120 (19.4%)
活動なし	498 (80.6%)
同居家族の介護・看病などの世話（乳幼児を除く）	
活動あり	62 (10.0%)
活動なし	556 (90.0%)
別居家族・親戚の孫や乳幼児の世話	
活動あり	301 (48.7%)
活動なし	317 (51.3%)
別居家族・親戚の介護・看病・家事・手伝いなどの手助け（乳幼児を除く）	
活動あり	133 (21.5%)
活動なし	485 (78.5%)
友人・近隣の乳幼児の世話	
活動あり	22 (3.6%)
活動なし	596 (96.4%)
友人・近隣の介護・看病・家事・手伝いなどの手助け（乳幼児を除く）	
活動あり	41 (6.6%)
活動なし	577 (93.4%)

表6 初回調査時の社会的側面（n=618）

	人 (%)
友人と会う頻度	
高群（週に1回以上）	236 (38.2%)
中群（年に数回～月に2回）	339 (54.9%)
低群（なし）	43 (7.0%)
社会活動	
高群（2、3つ）	288 (46.6%)
中群（1つ）	179 (29.0%)
低群（なし）	151 (24.4%)
プロダクティブな活動	
高群（2～7つ）	252 (40.8%)
中群（1つ）	197 (31.9%)
低群（なし）	169 (27.3%)

表7 初回調査時と追跡調査時の各満足度指標（平均値±標準偏差）

	初回調査時	追跡調査時
生活満足度	5.3±2.2	5.4±2.2
日頃の生活満足感	7.7±1.5	7.7±1.5
社会活動に関連する過ごし方満足度	46.9±11.2	46.8±11.3

表8 各満足度指標に関連する要因（重回帰分析結果）

	生活満足度	日頃の生活満足感	社会活動に関連する過ごし方満足度
	$\beta$	$\beta$	$\beta$
年齢	-.120***	-.057	-.095***
性別（1=男性）	.008	-.055	.010
家族形態（1=独居）	-.018	-.021	.002
IADL（1=自立）	-.021	-.050	-.018
経済的な暮らし向き	.044	.065*	.082**
友人と会う頻度			
低群 vs 中群	.035	-.036	.058
低群 vs 高群	.052	-.005	.085
社会活動			
低群 vs 中群	.044	.047	.137***
低群 vs 高群	.090*	.104*	.161***
プロダクティブな活動			
低群 vs 中群	-.025	-.020	.023
低群 vs 高群	-.017	.011	.102**
初回調査時の生活満足度	.662***	—	—
初回調査時の日頃の生活満足感	—	.591***	—
初回調査時の社会活動に関連する過ごし方満足度	—	—	.637***
調整済 R <sup>2</sup>	.515***	.437***	.618***

\*\*\*p&lt;.001, \*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05

#### IV. 考察

本研究では、千葉県都市部に在住する高齢者を3年間追跡した縦断調査データを用いて、社会的側面に着目し、サクセスフル・エイジングに関連する要因を検討した。サクセスフル・エイジングの測定には、生活の満足度に関する3つの指標を用いた。

多変量解析の結果、まず、年齢が3つの指標のうち2つに統計学的に有意な関連を示し、年齢が若い者ほど、生活満足度が高く、社会活動に関連する過ごし方満足度が高かった。概して、年齢は主観的幸福感に関連しないとの報告が多い。わが国で主観的幸福感に関連を示す要因として一貫して認められているのは、健康度、社会経済的地位、家族の3つとの指摘がある<sup>4)</sup>。Menecによる縦断研究においても、年齢は幸福感にも生活満足度にも関連を示していない<sup>8)</sup>。一方で、MroczekとSpiroは年齢と生活満足度の変化に焦点をあて、男性を22年間追跡した研究で、生活満足度の高さは65歳でピークを迎えてその後は低下していたことを報告している<sup>21)</sup>。

本研究で年齢と主観的幸福感に有意な負の関連が示された理由としては、第1に、初回調査の時点で、高齢の者ほど健康度が低下しており、その健康度がIADLで把握しきれない部分であったため、統計学的にIADLをコントロールしたうえでも負の関連が示されたのかもしれない。第2に、本研究は3年間の縦断研究であるため、高齢の者ほど3年後の追跡調査までに、健康度が低下しやすかったこと、ともに高齢になる配偶者や友人などの親しい者の死といったネガティブなライフイベントが発生しやすかったことが、この結果をもたらしたのかもしれない。年齢と主観的幸福感には関連がないとの知見<sup>4,8)</sup>が多いため、出生コホートによる差異やその他の理由の検討を含め、今後慎重にみていくことが求められよう。

経済的な暮らし向きは2つの指標に有意な関連を示し、経済的な暮らし向きが良好な者ほど、日頃の生活満足感が高く、社会活動に関連する過ごし方満足度が高かった。経済状況やこれを含む社会経済的地位は、主観的幸福感の主要な関連要因<sup>4,22)</sup>であるため、本研究の結果は妥当といえる。しかしながら、主観的幸福感を測定する尺度として代表的な1つである生活満足度には、関連がみられなかった。筆者による複数の横断研究では、経済的な暮らし向きと生活満足度との間に一貫して強い関連がみられていた<sup>23,24)</sup>ことを考えると、本研究が縦断研究であったことが影響した可能性が高くなる。生活満足度はこれまでの人生の満足度といった回顧的なものを含むため、追跡調査で生活満足度をたずねた時点では3年前の経済的な暮らし向きの影響が特に小さくなりやすく、関連がなくなるのであろうか。経済状況と生活満足度の関連については先行研究の知見<sup>4,22)</sup>と異なっていたため、縦断研究では関連がない結果がみられやすいのかを含め、今後の検討が望まれる。

社会活動と主観的幸福感、研究により有意な関連がある場合とない場合がある<sup>8,25,26)</sup>。本研究では、縦断調査データに基づき、かつ友人と会う頻度やプロダクティブな活動という社会的側面の複数の変数を同時投入して分析している。そのうえでも、社会活動は3つの指標すべてに有意な関連を示していた。社会活動の中群との関連がみられない指標があったが、社会活動が活発な者（高群）はすべての満足度を高めていた。内閣府の高齢者調査では、社会参加活動をして良かったことについて多い順に、「新しい友人を得ることができた」、「生活に充実感ができた」、「健康や体力に自信がついた」となっている<sup>27)</sup>。このように、社会活動が活発な者はさまざまな効果を得やすくなるため、満足度が高くなると推察される。社会活動に関連する過ごし方満足度を指標とした分析では、社会活動の中群と高群ともに有意な関連を示し、かつ社会活動の影響の大きさを示す $\beta$ 値（標準偏回帰係数）も大きかった。この指標は、社会活動などの活動の満足度に焦点をあてたものであるため、妥当な結果といえる。

プロダクティブな活動は1つの指標に有意な関連を示し、プロダクティブな活動が活発な者（高群）は



社会活動に関連する過ごし方満足度が高かった。プロダクティブな活動の構成項目をみると、他者や社会に貢献するような活動となっている。このような貢献的な活動から得られる心理的な効果は、主観的幸福感を測定する一般的な尺度というよりは、他者や社会に役立っている感覚から得られるような質の満足を把握しようとするものでないと、とらえにくい可能性が考えられる。また、プロダクティブな活動には、介護や看病など、精神的な負担となりやすいものも多い。そのため、活動したからといって満足度を上昇させるとは限らない。これらの理由により、生活満足度や日頃の生活満足度の2つの指標と関連がなかったと思われる。一方で、社会活動に関連する過ごし方満足度には、下位尺度の他者・社会貢献満足度が含まれており、他者や社会に役立っている感覚から得られる満足が敏感に把握できるため、有意な関連が示されたと推察される。

本研究では、サクセスフル・エイジングの指標として、生活の満足度に関する3つの指標を用いた。分析の結果、複数の指標に関連がみられた要因をみると、年齢が若いこと、経済的な暮らし向きが良好なこと、社会活動が活発なことの3つであった。年齢に関しては、誰もが平等に歳を重ねていく。個人や社会において、若いほうが望ましいという考え方が強くなると、高齢者やより高齢の者にとって息苦しい世の中になってしまい、エイジズム（高齢者差別）<sup>28)</sup>の蔓延も懸念される。主観的幸福感の一般的な尺度の構成項目にみられるように、老いを受容することが高齢期をより幸せに生きていける近道ともいえる。老いを受容して生きることの大切さの啓発を進めていくことが求められる。地域や社会においても、より高齢になっても尊厳をもって生きられるような、そして、老後不安が少なくなるような環境を整備していくことが必要である。

経済状況は、生活を組み立てていくうえで重要なものであり、人とのつながりの多寡、望ましい健康状態の維持や生命をも左右する<sup>29,30)</sup>。保健・医療・福祉をはじめ、経済状況が苦しい者でも参加しやすい社会的な活動の用意も含め、総合的な低所得高齢者対策を促進することが求められよう。社会活動は、長期化した高齢期の生活を豊かにする可能性をもっている。より多くの高齢者が、自分自身の関心や健康状態に応じた活動に参加できるよう、また、高齢期になるまで仕事一筋であったために社会活動への参加を躊躇したり、転居により見知らぬ土地での新たな生活に不安を感じる高齢者が活動に参加しやすいよう、幅広い方策を講じていくことが必要であろう。

本研究の限界について、本研究の結果は、千葉県都市部に在住する65歳から79歳までの者を対象にしたものである。そのため、80歳以上の高齢者を対象にした場合や、ほかの都市部の高齢者を対象にした場合にも同様の結果が得られるのかどうかは不明である。有効回答が得られなかった者については、心身の状態が望ましくないため回答への協力が困難であった者が比較的多いことが考えられる。よって、本研究で分析できた対象者は心身の状態が良好であったりそれほど悪くない者の割合が高いことが推察される。同様に、初回調査では有効回答が得られたが、追跡調査までの間に心身の状態が悪化したり、入院や死亡により追跡調査で回答が得られず、縦断調査データに含まれなかった者もいると思われる。以上のことをふまえて、本研究の結果を解釈する必要がある。

[本研究は科学研究費補助金（22730444）の助成を受けて行った。]

## 文献

- 1) 柴田博, “サクセスフル・エイジング”. 老年学要論: 老いを理解する. 柴田博編者代表. 建帛社, 2007, p.55-61.
- 2) 小田利勝. サクセスフル・エイジングの研究. 学文社, 2004.

- 3) 杉澤秀博. “領域別にみたサクセスフル・エイジングの概念と測定指標の特徴：米国における展開過程を中心に”. ミドル期の危機と発達：人生の最終章までのウェルビーイング. 藤崎宏子, 平岡公一, 三輪健二編. 金子書房, 2008, p.23-47.
- 4) 古谷野亘. “幸福な老いの研究”. 改訂・新社会老年学：シニアライフのゆくえ. 第2版, 古谷野亘, 安藤孝敏編著. ワールドプランニング, 2011, p.139-151.
- 5) Rowe, J.W.; Kahn, R.L. Successful aging. *The Gerontologist*, 1997, 37(4), p.433-440.
- 6) Crowther, M.R.; Parker, M. W.; Achenbaum, W.A. et al. Rowe and Kahn's model of successful aging revisited: Positive spirituality -The forgotten factor. *The Gerontologist*, 2002, 42(5), p.613-620.
- 7) 佃亜樹. 「サクセスフル・エイジング」の再定式化への一考察：ジェロトランセンデンス理論の到達点と課題. 立命館産業社会論集. 2008, 43(4), p.133-154.
- 8) Menec, V.H. The relation between everyday activities and successful aging: A 6-year longitudinal study. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 2003, 58B(2), p.S74-S82.
- 9) Brandt, M.; Deindl, C.; Hank, K. Tracing the origins of successful aging: The role of childhood conditions and social inequality in explaining later life health. *Social Science & Medicine*, 2012, 74(9), p.1418-1425.
- 10) 杉澤秀博編著. “高齢者と社会”. 老年学要論：老いを理解する. 柴田博編者代表. 建帛社, 2007, p.199-278.
- 11) 杉澤秀博. “高齢期の社会関係を捉える：概念と測定”. 老年学要論：老いを理解する. 柴田博編者代表. 建帛社, 2007, p.207-217.
- 12) 杉澤秀博. “高齢期の家族・友人”. 老年学要論：老いを理解する. 柴田博編者代表. 建帛社, 2007, p.218-224.
- 13) 浅川達人. “近隣と友人”. 改訂・新社会老年学：シニアライフのゆくえ. 第2版, 古谷野亘, 安藤孝敏編著. ワールドプランニング, 2011, p.131-138.
- 14) 千葉県総合企画部統計課. 平成22年国勢調査：人口等基本集計結果の概要. <https://www.pref.chiba.lg.jp/toukei/toukeidata/kokuseichousa/documents/h22gaiyou.pdf>, (参照2015-10-17).
- 15) 総務省統計局. 平成22年国勢調査, 人口等基本集計結果, 千葉県. 「第3-2表, 年齢（各歳）, 男女別人口, 年齢別割合, 平均年齢及び年齢中位数（総数及び日本人）」<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001035000&cycode=0>, (参照2015-10-17).
- 16) 総務省統計局. 「平成22年国勢調査 人口等基本集計結果 要約」<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kihon1/pdf/youyaku.pdf>, (参照2015-10-17).
- 17) Herzog, A.R.; Kahn, R.L.; Morgan, J. N. et al. Age differences in productive activities. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 1989, 44(4), p.S129-S138.
- 18) Danigelis, N.L.; McIntosh, B.R. Resources and the productive activity of elders: Race and gender as contexts. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 1993, 48(4), p.S192-S203.
- 19) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博ほか. 生活満足度尺度の構造：因子構造の不変性. 老年社会科学. 1990, 12, p.102-116.
- 20) 岡本秀明. 高齢者向けの「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討. 日本公衆衛生雑誌. 2010, 57(7), p.514-525.
- 21) Mroczek, D.K.; Spiro, A. Change in life satisfaction during adulthood: findings from the veterans affairs normative aging study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2005, 88(1), p.189-202.
- 22) George, L.K. “Perceived quality of life”. *Handbook of Aging and the Social Sciences*. 6th, Binstock, R.H.; George, L.K., eds. Academic Press, 2006, p.320-336.
- 23) 岡本秀明. 地域高齢者のプロダクティブな活動への関与と well-being の関連. 日本公衆衛生雑誌. 2009, 56(10), p.713-723.
- 24) 岡本秀明. 都市部に在住する高齢者のプロダクティブな活動と well-being の関連：千葉県市川市の調査から. 和洋女子大学紀要. 2014, 54, p.35-47.
- 25) Litwin, H. Activity, social network and well-being: An empirical examination. *Canadian Journal on Aging*, 2000, 19(3), p.343-362.
- 26) 岡本秀明. 高齢者の社会活動と生活満足度の関連：社会活動の4側面に着目した男女別の検討. 日本公衆衛生雑誌. 2008, 55(6), p.388-395.
- 27) 内閣府. 平成25年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果. <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/gaiyo/pdf/kekka1.pdf>, (参照2015-07-21).
- 28) 原田謙. エイジズム研究の動向と課題. 老年社会科学. 2011, 33(1), p.74-81.
- 29) 近藤克則編. 検証「健康格差社会」：介護予防に向けた社会疫学の大規模調査. 医学書院, 2007.
- 30) 藤田孝典. 下流老人：一億総老後崩壊の衝撃. 朝日新聞出版, 2015.

岡本 秀明（和洋女子大学 生活科学系 准教授）

（2015年11月10日受理）